

## 第5章 昭和54・55年度調査の概要

### 第1節 昭和54年度調査の概要

昭和54年度は理学部（P L. 1-13）、農学部（P L. 1-14）、本部（P L. 1-15）の構内において事前調査を実施した。現在、資料整理を継続中であり詳細は後日に譲ることにしその概要を述べておく。

理学部構内では校舎新営工事、農学部構内では動物舎新営工事にともないそれぞれ調査を実施した。両地区とも大学キャンパスの南部に位置し、前者は構内地区割のO-19区、後者はP-18区に該当する。両調査区とも道路を隔てた東側の農園との比高が5 m近くあり、調査当初より東からのびる低丘陵がこの地区でかなり削平を受けていることが予想された。したがって両地区とも予定地内に幅3 mのトレンチを設定して遺構、遺物の有無ならびに土層の堆積状況を観察した。

O-19区では予定地内に南北方向3本、東西方向1本の合計4本のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、現地表面から黄褐色粘質土の地山に到る堆積土はすべて厚さ30~40cmの構内造成時の置土であり遺構・遺物は認められなかった。現地表面の標高は約21.10mで平坦であった。

P-18区はO-19区調査地点の北約70mに位置する。現地表面の標高は約20.60 mでほぼ平坦である。予定地内東西方向に2本のトレンチを設定したが、東側で約60cm、西側で約110cmの構内造成時の置土直下の黄褐色粘質土の地山となっており、遺構・遺物は確認されなかった。

また、本部構内では管理棟新営工事にともない予定地内約800㎡について調査を実施した（Fig.45）。調査区は大学キャンパス内の北部に位置し、構内地区割のL-14区にあたる。北東から延びる丘陵の先端部附近に立地し、現地表面の標高は東部で22.20 m、東部で21.50 mで東から西に向って傾斜している。黄褐色粘質土の地山面の標高は東部で21.80 m、南西部では19.40 mであり、東部から西部にかけて緩やかに傾斜しており、特に南西部においては急激に下降している。地山面の下降する南西部においては地山上に2枚の無遺物層をはさんで下層から縄文時代晩期~弥生時代後期、弥生時代前期~弥生時代後期、弥生時代中期~古墳時代後期に属する3枚の遺物包含層を確認した。東部においては構内造成

時の置土直下が地山となっている。最上層の遺物包含層からは有孔円枚4、剣形品1、斧(鍬)3、楯1の滑石製模造品のほかに手捏土器多数が出土している。

遺構は南西部の地山が下降し始める部位から土壌4基を検出した。このうち2基の土壌からは多量の遺物が投棄された状態で出土した。弥生時代中期後半～後期初頭に属すると思われる土壌は平面形態楕円形を呈し、長軸188cm、短軸134cm、深さ約45cmの規模をもつ。また弥生時代後期終末～古墳時代初頭に属すると思われる土壌は平面形態不整五角形を呈し、長軸174cm、短軸167cm、中心部での深さ47cmの規模をもつ。

他の2基は平面形態長楕円形で長軸174cm、短軸60cm、中心部での深さ29cmの規模をもつものおよび平面形態楕円形で長軸76cm、短軸50cm、中心部での深さ16cmの規模をもつもので、内部からの遺物の出土はない。

また、北部においては「コ」の字形にめぐる室町時代の溝の内部に井戸、土壌墓を備え持つ建物跡が検出された。囲繞する溝は幅80～110cm、深さ15～35cmで断面形態は東部で「U」字形、西部で逆梯形を呈する。井戸は環溝に囲まれた部分の南西部で検出された石組井戸である。石組上面径は71×81cm、深さ203cmで平面形態はほぼ円形である。内部からは土師器の坏および木器が出土し、底面には据えおかれた状態で曲物が認められた。土壌墓は南西部の環溝屈曲部附近に位置する。平面形態は長方形で長軸81cm、短軸49cm、深さ48cmの規模をもつ。底面から土師器の杯および骨片が出土した。

以上、述べてきたようにO-19区、P-18区における調査では後世の削平のため遺構・遺物は認められず、その内容については不明の点が多い。しかし、東部に位置する丘陵上には弥生時代中期から中世に到る住居跡、溝等が検出されており、削平の状態から推して両調査区一帯においても同様な遺構が存在していた可能性が大きい。

また、L-14区における調査では生活遺構を検出した。弥生時代に属するものとしては少なくとも2時期の土壌を検出したが、それらに伴うと思われる明確な住居跡は検出されていない。室町時代の建物跡は近年資料が増加しつつある環溝を有するもので内部に井戸、土壌墓を付設し、中世末期の生活形態のひとつのパターンを示唆するものとして興味深い。

昭和54・55年度調査の概要



Fig.45 L-14区遺構配置図 (200分の1)